

浄土

九 月 號

目次

再出發……………二

眞野正順

生と死と魂……………六

佐藤密雄

ストリンドベルグと殉教者……………三

吉田二次郎

秋草帖……………八

ふじた・ひろし

念佛特集……………一〇

松濤誠廉

竹中信常

藤田寛雅

芝園だより

再出發の御挨拶

眞 野 正 順

このたび、中村辨康氏の御都合から、私がふたたび「浄土」を御預りすることになりました。顧みれば、昭和十年、全国の同志諸君の協力によつて「浄土」を創始し、その華の如き創業時代をわすか三年にして、突然病を獲て、退いてから、もう一と昔も遠く過ぎてしまいました。まことに夢のやうです。

その間、數多くの同志の力によつて、「浄土」が雄々しく發展をつづけてゆくのを、病床から眺めてゐるのは、まことに尊いものでありました。しかし十年の間とてもまた人生です。數多くの同志の顔はつきつきに現はれて、これを堅持してくれましたが、また其中には、前途をおしまれつつすでに地上を去つてゆかれた赤尾、辻、佐賀君等の影が數えられます。ことに戦時中の狂瀾怒濤や、一物も残さず焼拂はれて迎えた戦後の荒涼さ。それ等に堪えて、よくこれを今日迄支持して來て下さつた中村、村瀬、東等諸氏の勞苦には、深く感謝いたします。

さて、このたび再出發に當りまして、新しく「浄土宗教學院研究所」の各位の熱誠なる全面的協力を得ることになりました。この研究所は、東京大正大學、京都佛教專門學校關係の學人を悉く網羅したもので、その全面的協力によつて、今後の「浄土」は清新かつ充實せる内容で横溢するに相違ありません。ただ、是等の學人の中には、極めて豊かな内容をもつてゐても、これを「浄土」らしく平明に書き述べるのに慣れてゐない人達が多く。そのため、初めの内は多少生硬な文章が現はれるかも知れません。特に今月號は此感が深いのです。これは全く私の責任であります。然し、これから號を追ふて、段々平明で興味深いものになつてゆきますから、暫の間御しんぼうを願います。

第二に、近來いろいろの事情で、内容がすこし單調になつておりますが、これからは、あらゆる困難をしのいで、多彩にして興味ある内容を豊かに盛つて行きたいと思つてゐます。そのため、執筆者も廣汎に社會一般の名家の協力を求め、滋味ゆたかな信仰雜誌として——云はば「浄土ダイジェスト」として——皆様に愛されるようになりたいと思つてゐます。

最後に、「浄土」はどこまでも法然上人を思慕するものの共同機關でありまして、決して或る個人や少數者のものではありません。私は編集者としては最後まで責任を負つてゆきますが、かと云ふて決して私のものなどとは思つておりません。執筆される方も愛讀される方も、自分達のものと思つて、これを愛して下さい。此意味で、編集者などはいくら交代しても、永遠に後代に遺産されてゆく、法然思慕者の公的財産だと理解して下さい。そして守つて下さい。



ストリンドベルグと殉教者

吉田 絃二郎

ストリンドベルグといへばかれの寫眞を見たばかりでも憤怒嘆悲の象徴であることが想像される。眼の底に潜んでゐる冷たい光りは、あらゆる人間生活の虚偽、傳統偽善を剔抉して、赤裸々な眞實を掴み出さないでは置かない底の科學者的冷靜さ……否ストリンドベルグの場合には冷酷さといつた方が適當である……を湛へてゐる。

かれが追はれるやうにして故國スウェーデンを出でて獨逸に住むや、かれは一切の文學を斷念して、ひたすら科學の探究に没頭した。當時かれの一友人はかれにアメリカの詩人ワルト・ホイットマンの話を持ち出したが、かれはその話題を問題にしなかつた。かれはホイットマンの詩よりも、むしろ西部インディアン你的生活狀態に興味を感じてゐたといはれる。

當時かれの家はベルリンに近いところに在つたが、書

齋はことごとく科學書に埋められ、かれは日夜、天文學、植物學、動物學、地質學の研究をつづけて行つた。

この眞理の追求に對する熱誠はやがてその文學上の仕事にかれの狂熱的な眞率さとなつてあらはれたのであつた。

かれの一結婚一が發表さるるや世論は湧いた。新聞紙は筆を揃へて、この作品を非道德的であり、人類を冒瀆するものであるとして攻撃した。かれが蠢々たる衆愚の喧騒を避けんと、海に出れば、島人たちはかれの上陸を拒み、家に歸れば國家の法廷はかれを牢獄に投すべき手續を執らうとしてゐた。

幸にしてかれは罪を免れたが、さらに恐ろしい病がかれを待つてゐた。かれほど社會、宗教、道德に向つて冷たいメスを揮つた人は少いであらう。しかもかれはそれ

以上にさらに深くかれ自身の魂と肉體に對して冷嚴な解剖のメスを握つた。その結果はかれ自身の一時的發狂であつた。

或る日かれは隣りの家で、誰れかシューマンの「アウフシュワング」を弾いてゐるピアノの音を聴いた。そのピアノは次ぎの日も又次ぎの日も四時から五時の間に聴かれた。そのピアノを聴く毎にかれは身に近く恐るべき危険の迫つてゐるという恐怖觀念に襲はれた。また或る時はかれの肖像畫を描いてゐるノルウェイ人の畫家を訪ねて行つたが、畫家の門前に大きな丁抹人が寝てゐるのを見て、これは危険だから、入つてはならぬといふお告げであるといつて、引きかへしてしまつた。そして或る時はその畫家に面と向つて「君はこの前逢つた時は殺人者の顔をしてゐたよ」といふやうなことを平氣で語るやうになつた。かれも亦遂にアラン・ポウやウイリアム・ブレークやタッソウと等しく幻影に追はるる精神的疾患の虜となつた。

ブレークの如きも、年少のころ父に伴はれて或る彫刻家に弟子入りをしたが、かれはその師匠を一目見て「あの人は首縊りの人相をしてゐる」といつて、一日きりで

弟子入りを止してしまつた。果してその彫刻家は後年印度政廳の官吏となつたが、惡事を働いて絞首臺上の露と消えた。

ブレークのやうな人は先天的に幻影を見るべく生みつけられた人であつたと考へられる。

ところでストリンドベルグの場合はすこし異つてゐるところがあるやうに思はれる。ストリンドベルグは、かれが自己の信條に熱心な餘り狂人的性格にまで陥つたのだと見る方が正しいやうに思はれる。かれは教權派の人から見れば教權を否定し舊い戒律を否定する點に於いて惡魔の弟子である。

イブセンもトルストイも亦教權派の人々から見れば惡魔の弟子であつた。

しかもこれ等の異端者たちこそ實は最も宗教的であり殉教者的であつた。トルストイがいかに宗教的であつたかについては茲に説く必要はない。あの瞋恚の炎に生涯を燃やしつづけたストリンドベルグも實は敬虔な神の僕であつたことは、わたくしたちに示唆するところが多い。

かれが婦人憎惡者であつたことは有名である。しかも

この婦人憎悪者の臨終の部屋にはピアノの上にベートヴェンのデス・マスクが飾られてあつた。かれは死の刹那まで音楽によつて救はれた。あの狂人のやうな険しい眼を持つたストリンドベルグがベートヴェンの月光曲によりてその魂の解放を見出し得たことを考へるとここにも尊い暗示がある。瞋恚の炎の底に凡愚の美しい殉情のやさしさがうかがはれる。

婦人憎悪者といはれたかれが病院の親切な尼僧に永遠の慈母を見出し得たといふことも考へさせられるものなりである。

死が近づいて來た時、かれはかねて傍に置いた聖書を取り上げ、はつきりした聲で言つた「わたしが死んだらいつもわたしがたづさへてゐた小ひさな十字架と、この聖書をわたしの胸の上に置いてくれ。それから朝早く葬つてくれ。富める人たちの間に葬つてくれるな。山のいただきの樅の下にただ獨り靜かに眠らせてくれ」

ストリンドベルグが死んだ時ロシヤからゴルキイはメツセーヂを送つても、その中にストリンドベルグをダンコーになぞらへてゐる。ダンコーといふのはダニウプ地方の物語の主人公で、暗の中から人類を救ふために、自分

の胸を裂き心臓に火を點け、その光りを高くかかげて道の案内をしたのであつた。

法然上人の場合、日蓮上人の場合を同一のレベルで論ずることは上人たちの徳を冒瀆することになるかも知れないがともかく、古への上人たちの苦行精進の途を、最も俗人らしい、凡愚らしい姿に於いてストリンドベルグも亦辿つて行つたと言ふことができる。

かれの生涯は凡愚のひたむきな殉教者の生き方を暗示してゐる。それは理智と殉情の絶へざる相刻である。

「わたしは青年のころからキリストの十字架を身につけてゐた。しかも鞭打たるる奴隸の存在を許す神を拒まな

いではをれなかつた」とストリンドベルグは言つてゐる。十字架を身につけてゐる純情の青年ストリンドベルグと、神を拒否する悪魔の弟子たるストリンドベルグが生涯を通じてかれの一身の裡に闘つてゐた。殉情の詩人たるかれと真理の追求者たる科學人のかれとである。

しかもこの二つの相刻せる世界を一身の裡に闘ひつづけさせる悲壯な生活から決して逃げ出さなかつたところにわたくしたちは惹きつけられる。近代的な宗教生活はここに見出されるのではあるまいか。わたくしたちの一つの心の裡に見出さるるこの二つの相刻せるものの残酷な闘ひの後に、眞の宗教的悟道は來るのではあるまいか。

生と死と魂

佐藤 密雄

人は生きつゞけて居るもの、生活の現實に死を持たないものである。日々に新たな生をのみ創造して居るものである。生活に逆行して、背後を觀念すれば、死せる昨日が永遠の過去へ連続して居るが、生活は前向きで、生的創造以外にはない。

諸行無常とは、諸々の存在の無常の謂だが、存在を一行一と表現したのは、現實的存在は、現實的な爲に新なる生を創造しつゞけるものであることをあらはすためで、常に新たな現實を持つのが無常である。そしてかゝる行的現實者の具體的なものが人間なのである。

人は前向きに生きつゞけてゆくが、事實とは逆に後向きに

死を觀念させられる必然性をも持つてゐる。人は生きる現實を生理的心身で實現する。然るに、心身は生を實現しながら死へ没落して行く。死は此身に、不定偶然に來る筈で、生きる前進は、此身に取つては、不定偶然な死を確實なものとする死の行進である。諸行無常の有り方は、偶然な死を出迎へに行くことでもある。ひたすらなる生の創造である生活が具現されるそのことが、没落老衰の死の行程であること、このことが、人生の迷ひの根、苦惱の源泉で、人世不可解の嘆聲を出させる元である。

二

心身に生を具現させるものを精神と呼び、生を具現する心身を肉體と呼ぶならば、一つの生きる事實の中で、前者は生

きるもの、後者は死ぬものとして、矛盾相克して絡みあつてゐる。此矛盾的な絡みあひに依つて、其處に成立したものが靈魂である。「魂」とは死して死なない不可思議なものだが、それは生きる事實である生活を具現さす精神とも異り、また生活を現する肉體でもない。だから、生きる現實にないものだが、死する肉體を考へ、此れを超えようとする時に、卒然として浮び出る第三のものなのである。

精神と肉體は二つの相反し相克するものである。肉體は排他的で孤立的・有限的である。形狀・能力・病苦生死各別であるが、精神は丁度その逆で、共鳴共感を求め、孤立的では成立せず、有限的では成立しないものである。此の兩者が、現じさせるものと現するものとなつて人間は實存して居る。人間が自己の實存を問ふことは、肉體と精神との對決を求めること、生きる精神につくか死する肉體につくかである。太宰治氏は後者について死した。然し佛教では自殺も亦殺人の罪を犯すことだ。太宰氏ではない我々は、此の對決の場面で、肉體から生れて精神に生きる魂を觀念して、兎も角、此れを逃れ出でて居るのである。

三

佛教は無我を説き、靈魂を否定する。然し否定するのは、人間の實存的實存として、打ち消し難くあるからである。此れを救ひ取らなくては、人間を生死の對決から兎も角逃避した不安に置くのみであつて、眞の解決とならないからである。靈魂を救ひ取るのは、生死の對決にせまられた人間の實存自體を救ひ取つて、生死のない生に生きつゞけさすことである。

人の魂を救ひ取るものは佛と淨土である。佛と淨土とは一假立一だと言はれるが、それは、靈魂が、人間の實存である生と死、精神と肉體の矛盾の故の一假立一だと言ふことと同じである。靈魂が人間の實存的實存である限り、佛と淨土とは萬有を生かす理と其れに生かされる一切の事との、一如整合の上にある實存的實存である。櫻木上に櫻を生命として花は笑つて散り、葉は麗らにして落ち行くが如くに、六尺の身、五十年の生を生むだ永遠の理をひたすら生命として生れた意義の全くして行き得るならば佛を要しない。このことの、事實として成り立たない人間、生かすものと生きるものの矛盾が靈魂を實存せしめて居るものに、眞理と眞理の事との一如的な行相が佛と淨土となつて此れを救ひ取ること、人間の實存に對應する實存である。

秋 草 帖

ふ ぢ た ・ ひ る し

朝の冷たい空氣の中に、秋を感じるようになって、お彼岸がくる。國民祝日とか、秋分とか、これからは新しい呼び方をするにしても、お彼岸とゆう名は、私たちの心情にびつたりする。佛前に供えられた秋の草花は、秋のしみじみとした想いを漂はせている。

佛に花を捧げるとゆうことは、美はしい心である。花を愛する心は、美はしいものに惹かれる心である。佛と花と、そこには聖と美と、宗教と藝術との混融してゆく姿がある。

バルザックの「谷間の白百合」をよむと、あの美しいモルソフ夫人が、その日その日の氣分に適はしいいろんな花を、部屋の花瓶に挿したとゆうことが書いてあつたとおもう。あるときは純白のバラの花が、あるときは眞紅のカーネーションが。けれどもそこに、私たちの知つてゐるような、藝術にまで昇華した挿花の姿があつただろうか。日本の生け花が奥深いところにもつてゐる聖なるものに連る心があつただろうか。

◇ 生け花の歴史は、花道としての法式の

成立からいえば、室町時代からのことである。しかしその生け花を導いてきたものは、もつと古いところにあり、日本人の生活の中に、そして佛教の中にある。

佛教では、佛に花を獻ずることが、香をたくことと同じに、深い供養の意味をもつて、重要な地位を占めてゐる。佛教の言葉をみても、華嚴とか、法華とか、或いは枯華微笑だとか、華嚴世界だとか、花にむすびついたものが非常に多い。季節の花の美しいのをみて、その一枝を折りとつて、その香、その色をめづる心は、人間の生活とともに古くからあつたであろう。

家の前をとほる僧が、女郎花を手にしてゐるのをみて、何處へゆくのかときいたところ「比叡の山の念佛の立花に」もつてゆくとゆうので、和泉式部は、

名にしおはゞ五つのさはり有るものを、羨ましくものぼる花かなと記して結びつけたとゆうことが、新千載集にみえてゐる。女人を禁じた比叡の山の念佛會に捧げられる「女郎花」に寄せた歌であるが、歌そのものよりも、私は、まだ調べてもみないが、「立花」とゆう言葉にひかれる。華道の方でゆう「立花」が、その言葉として何處まで遡れるものなのか、この歌の詞書はひとつの例なのではなからうか。

そしてまた、女郎花のような、秋の野の草花、季節々々の花を日常佛に供えるとゆうことが、日本で佛教が傳はつた始めから行われていたことなのだろうか。これは疑問だとおもう。

秋の七草の萩が「おとこぐさ」とよばれるのに對して「おみなへし」——女郎花は、よく考えれば、私たちの感覺からは、おかしいものである。あの黄色の粟粒の様なポツポツした花、手ざわりの荒い莖

のかんじ、どうも楚々たる麗人のおもかげは、浮んではこない。中國では敗醬しくさつた酢といつて好まないあの香、この花がどうして、昔から日本では秋を象徴するものとなつていつたのだろうか。

あの香の強さは、利休も、茶室の花としてふさわしくないとして斥けている。實際には茶人はこの花を活けはするが、これなども、花そのものよりも、誰がつけたか、その名、その文字からの感じの方から好まれて有名になつてきたのだろう。妙なものである。

むかし都に近く八幡とゆうところに住む男ありけり。宮仕えするうちに、ある女人を想ひ、——この方はたしかではないが——想はれる仲になつた。けれども秋の空ゆく雲の様に、男心はふわふわと他の女にうつゝていた。心にふき入る秋風の、うすらさむい想いにたえがたくして、女人は八幡の淵に身を投げてしまつた。淵のほとりに脱ぎすてた山吹かさねの衣が朽ちて、生ひ出た草は、おみなへし、とゆう女郎花物語が伝えられているが、この女、あまりきれいではなかつたのかも知れない。

それはともなく、佛前の花に季節の花が日常のこととして供えられるようになったのにも歴史があるとおもう。法隆寺の古い記録の中に佛具として「金塗銅花瓶」のあることがみえるから、花が挿されたことはゆうまでもない。けれども季節々々の花とは斷言できない。東大寺の記録の中には、「造花」の費用のことが見えているし、蓮の花の多く用いられたことは、ゆうまでもない。今の寺院にみるように、蓮華の造花が多かつたのではないか。季節の花が供えられるようになったのは、それが少くとも一般したのは平安時代あたりからだとおもう。

佛教はわが國に伝えられてから、一路發展の方向を辿つたが、それ

は特に國家の政策とむすびついたために、個人の内面の生活に關することは、少なかつた。それが平安時代からあの天台、眞言の新しい展開から佛教は、貴族の生活に、その家庭の中にしみとおつていつた。寺院が住宅化し、住宅が寺院化するとゆうと、現代の私たちからは奇妙に考えられ一寸想像もつかないかも知れないが、そおした生活の場が非常に多く現われてくる。藤原道長の無量壽院は、彼の起居の場であり、彼はその阿彌陀佛の手にむすんだ五色の繪をとつて、生涯を終つた、そこが臨終の所でもある。寺院に住んだとゆう形を、譲りて自分の起居の場に佛をまつたと考えれば、何の不思議もないわけであらう。現在の私たちの生活にみられる形である。

われわれは床の間に活け花を飾る。床の間はまた、宗教的な場所であり、佛の座であつた。床の間は本來、聖なる場であるとゆうことは、われわれが、その座敷にあつての床の間をどお考えているかを想ひ返してみれば分ることである。

美しきものは、聖なる場所に飾られる。日常巷塵の中の生活も、床の間を中心として淨められてゆく。われわれの生活は刻々に變つてゆくであらう。生活様式も、従つて住居の形式も、しかしその中に、聖なるものを尊び、美しきものを愛する心は失ひたくない。人間精神の奥ふかいところには、佛に捧げられる花にも似た淨らかなものゝ、いつもあることを感じていたい。

念佛特集

念佛する心……松 濤

念佛つれづれ……竹 中

百 萬 遍……藤 田



念佛する心

淨土宗の中心は三心の念佛である。自己の不完全を深く反省して自からは救ひ得ざるものとし、これに反して阿彌陀佛の救済の力を信じて之によつてのみ救はれることを確信し心の底からその爲めに眞面目に念佛を唱へること、そして若し自己の生活中に何か善い行ひがあればその總てを捧げて往生を願ふ、この心の念佛である。これを更らに簡単に云へば、「助けたまへ、南無阿彌陀佛」の念佛である。かく念佛すれば吾らは彌陀の光に浴し、

死後西方に往生し得るのである。かく云ふと本宗の教義は誠に簡単なものであるが、釋尊の教へと二千五百年に渡る佛教の發展の結論であつて、若し本宗教義の依つて成つたところを見るならば所謂一代佛教に渡つて決して淺いものではない。さて吾々はこの心で念佛すればよいのであるが、實際の念佛行から分けて見ると二種に分れる。この區別は必ずなさねばならぬと云ふものでは無いが、かく分けて考へて見ると念佛行が如何に佛教の行として完全なものであるかがよく判るのである。

私達は朝夕佛前に坐つて念佛をする。その時の心は總じて云へば前述の心持ちであるが宗祖上人のなされた念佛のやり方とそれに從つて定められたと思はれる勤行式に從へば、光明遍照の偈の思ひに入つて念佛するのが正しいのである。即ち彌陀佛の光明はこの世界もこの自分をも照している。そして自分は念佛を唱へているのであるから今まさに光明に攝せられているのであると思ひで念佛するの

である。かく思つて念佛し續ける時、唱へる自己も忘れ苦の世界も消え、唱へる聲もなくなつて吾々は事實、光明の中に攝せられるのを感じるのである。そしてこの時若し僅かに心を動かして見るならば、彌陀の光明が自分をも照らし、目の及ぶ限り考の渡る限りの世界事物が皆な光明の中に一色たるを知るのである。これは全く理屈ではない、また希望でもなく吾々の感知する實際の姿である。彌陀の光のもと總ては同一である。喜びも悲しみも美しきものも醜きものも、吾れ唱ふるが故に皆な彌陀の光に照らされて一色であり平等であり、同一價值であり絶對である。「月影の到らぬ里はなけれども」の御歌もこの念佛の三昧の直觀世界を表したものと拜する。

この境地は聖道門の禪定の境地とどれだけの差があらう。眞言の入我々入、禪宗の光明藏の解脫直觀とどこまでの差があらう。天台の一念三千、華嚴の事々無礙の世界もこの直觀をその傳燈によつて理論つけたものでは無からうか。若し聖道門でこれ等が覺りの世界であるとするならば、彼等は念佛のこの三昧の世界も覺りの世界と云はねばならぬであらう。

それは兎も角、吾々はこの念佛三昧によつ

て今現に彌陀の光明に攝せられこの心を清め得るのである。そしてまたこの光明に基いて西方に彌陀のましますのを知るのである。然し本宗ではこれを覺りだとも往生だとも云はない。光明の世界を極樂だとも云はない。往生も覺りも死後の問題である。この考へ方は思ひなほせば、聖道門の落ちやすい覺りへの執着を自然に除いて呉れるものでもあり、覺者の「永遠の精進の徳」を容易に與へてくれるものでもある。本宗の行の尊さ有難さ深さ本宗を奉ずるものの感謝せずして可ならんやである。

この念佛三昧の外に本宗では更らに他の形の念佛を教へる。それは唱へながらの生活である。吾々はこの世界に生れた以上は周囲の人の爲めにも、また自己の爲めにも爲さねばならぬものがある。それが生活である。現在の如き敗戦の状態にあつてはただ生きんが爲めにも働いて日なほ足らざるが一般の日本人である。本宗では念佛しながら生きまゝと教へるのである。この苦の世界のはかなき喜び悲しみ、苦痛を生き感じつつも、唯死するまでの生活として、死したる後は彌陀に救はるる身として念佛しつつ生活するのである。念佛によつて光明三昧の心境を呼起しつつ然も確

實に善惡良否の倫理、科學、農工總ての生活形式を認め行つていく念佛三昧の形式である。この現在の姿をごまかさず、ありのままに現在の世間的知識をもつて見、しかも念佛の心の中に生きてゆく姿は、釋迦佛が覺られた後五十年間、苦の世界に說法されて出家者としての任を終られた御氣持ちと實質に於いてとれだけの差があらう。吾々は心を西方に置くが故にこの世界の一切に執着はない。然も形のある西方を信ずるが故にこの世界の現象をごまかさずにそのまま見つめることが出來、彌陀の念佛に生きるが故にこれをおのづと清め向上させてゆくことが出来るのである。いひかへれば、かくも容易に聖者に似た生活をなし得るのはこの形の念佛あるが故である。

かるが故に淨土の信者にはこの世界の様に形のある極樂が西方になければならぬのである。この極樂がなければ吾々にはこの世界の生活を正しくふむことが出來ぬのである。「正」が若し「眞」であるならば、極樂もまた眞に存在せねばならない。かるが故に吾々は西方を信じ死後の往生を信するのである。

この二つの念佛三昧が、淨土宗の念佛行で前者は別時念佛に、後者は諸行往生説に最も

よく現れている。そしてまた、吾々は前者により彌陀佛の存在を知り、後者により極樂の存在を知り、この兩念佛を總合して、助け給への不斷念佛に生きるのである。

念佛つれづれ

東北地方に「十九夜念佛」といふのがある。これは多分江戸時代に作られたものらしく、その頃の訛りが強く出てゐる。現在では單なる一片の紙葉として名残りをとどめるにすぎず、その諷誦の形式や節まわし、その他これに伴ふ行事については知るよすがもないが、その内容の一端を抜き書いて見るに次の如き文句が見られる。

かじやくしゆじやうしあくごう、かひようむじとんぢんち、ちみしんごひし、しよみやう、いさひがこんさげ。(我昔所造諸惡業皆由始貪瞋痴の文)

珠數すれば濁る心もすみやかに、菩提のたねもちかくなるらん、子の年八月十九日、十九夜おねぶつ(お念佛)はじまりて、十九夜堂もおたてやる、さてまた冥土へ參るには、

往生しらずの札を請ひ、十九夜御堂へ納め置く、歸命頂禮觀世音、七がんのその中に、如意輪觀音おたちある、あまたの女人の身代りに、血の池地獄におたちある、血の池のがるおねぶつ（お念佛）は、十九夜さまを御ほぞん（御本尊）に、月水をきらためしようじん（精進）で、あけまで御む口（不明）うとりぎり、われらも女人の文持で、今朝まで濟（澄）みしが早にごろ、穢れし我身をほとぐには、はんしが下の井の水で、滌ぎこぼすも尊とやな、天も地神も水神も、許るさせ給へ觀世音、十九夜申せし功德には、にしん（女身）成佛南無阿彌陀……」（……）は筆者）本文の大意は、子の年の八月十九日（陰曆）の夜「十九夜念佛」を行えばその功德によつて女子が血の池地獄に墮ることを免れるのとこのことを述べてゐるのである。佛教に限らず弘く一般の宗教の中でも血を不淨であるとして忌む風習は今も生きてをり、大槻博士の大言海に「けがれ」の語原は「けが」即ち怪我をして血の出ることであるといはれ、特に女子のそれは嫌忌を通り越して恐畏のまにまでなつてゐる場合が多い。それ故事實上何の惡事邪行をせずとも女子は死んで血の池地獄に墮ちるとの俗信は古くからあつた。いや地獄だ

の念佛功德だのといふ佛教的な要素が日本に入つて来る以前からの信仰で、これがたまたま佛教でいふ地獄の中の血の池地獄と結びついたものと考えて差支えなからう。そしてそこから脱け出すためには何んとしたらよいだろうかといふことになる、と、「念佛」といふ極めて功德の多い、而も行ふに容易な行法が一番ふさわしいわけで、従つてこの場合にいはれる「念佛」といふのは宗門の學者が色々に説明してゐるようなむづかしい内容を持つたものではなく、極めて單純素朴に「助けて頂きたい」といふ氣持ちから思はず口に出た「おねぶつ」なのである。

このように、ものごとを非常に素直に、ありのままに受けとつて、疑つたり無理したりしようなどといふことはせず、そのままに信じて行くといふ、心の素朴な人々の間にも、「念佛」といふものがいかにもありがたい、尊い、そして功德のあるものであるといふことは心の隅にまで浸み入つたことであらうしいやむしろ心がすなをだからこそ念佛の功德の無限であるとの教えをそのままに信じて疑はなかつたのである。そしてこの人々にとつて念佛の功德はやがては無邊無量でどのような方面に向つて用いても有効であるといふよ

うに考えられるに至るのは、極めて當然のことといふことが出来る。さればこそ、これを女子の生理作用と結びつけて十九夜念佛が生まれ、これを農村生活の人々が雨乞に結びつけてみたのが近州神崎郡左目村にて毎年六月一日につとめる「涼み念佛」の風習となり、更に一步進んで豐作祈念の心が加はつて「天道念佛」が行はれる様になつた。新編常陸國誌卷十二によると「常陸にては毎年三月、村里の男女集會し、鎮守社頭若くは佛寺の庭前にて、まづ發願文を唱へ、鼓を打ち鐘を鳴らして念佛を唱へ、男女袖を列ね周旋して躍舞ふ。日出を拜し日暮に終る」とある。此天道念佛は鎌倉時代の末から足利時代の初めにかけて起り、稻や麥に風水等の災厄なからんとを天道に祈願するための念佛なのである。往生淨土の來世利益の念佛が、生理現象にかわりを持つたり、雨乞や豐作などの現世利益にききめがあるとは、きまぢめな宗門學者達にとつては正しく邪義・異行であるかも知れぬが、現實に行はれてゐる念佛の大半以上がこゝろなのだから仕方がない。

だがわれわれとしては仕方がないで諦めては居られないので、何故そなたか考えてみななければならぬ。その場合第一につき

突ることは念佛の「大衆化」といふことである。「教義上すぐれた念佛もただすぐれてゐる」といふ丈けでは、そして又教理的にそれを理窟の上から説明しただけでは、一般大衆にはかかわりの薄い、あつてもなくてもよいようなものでしかない。元來念佛の念佛たる所以は理窟なしとなえるといふにあるのであるから一人でも多くの人が、一聲でも多く念佛すればよいわけであり、従つて理窟よりはまづとなえさせることの方が先決問題となる。

さればこそ空也の「踊り念佛」も、道空の「六齋念佛」も、良忍の「融通念佛」も、聖覺法印の「百萬遍」も、教義とか理論とかは後にかくれて、まづ踊り歌い唱えるのが先であつた。又さうであつたからこそ辻々村々にまでひろまつて行つたのである。このような「大衆化」が遊藝の方面に浸潤しては壬生狂言となり、神道と一緒になつては攝津多田村の多田神社に傳はる「南無手踊り」にまで變形した。高野辰之博士の「日本歌謠集成」巻四、佛會歌謠篇を開くなら、そこには講式の項下に六座念佛式、和讃の項に名號和讃、念佛和讃、補遺の項に寒念佛の讃などの集録が見られるが、和讃なるものがむづかしい經典を讀み得ぬ庶民のためにこれを平易にくだいて、

ふしつけて大勢の人々に誦誦せしめる目的で作られたものであることを思えば、ここに見られる和讃類の念佛弘通にはたした役割は偉大であるといふべきである。

念佛の祖師達及び先達のこのような努力工風は當然その實を結び、淨土思想、念佛信仰の興隆に導いたことは今更言ふまでもないことであるが、表面に、教門の上に現れた結果と共にわれわれとして忘れることの出来ないのは、その裏づけとして社會の末底に秘む習俗としての念佛である。例えば越後、栃尾町に残る念佛塚などその好例である。此町では昔若者達が寒三十日間毎夜社地墓所火葬場等をめぐつては念佛供養をし、三年つとめ終ると塚を一つ築いた。熱信なるものは父と母と自分自身のために三年づつ三度、合計九年の寒念佛を修め三つの塚を造つたとの事である。その他下野日光入町久次良村寂光寺に行はれる釘拔念佛、鳥取市内田の千日念佛等々更には現に農漁村に行はれる念佛講等々、いづれも、ひたすら念佛することのみを以つて満足する人々が自分等の生活環境にそれぞれ結びつけて、最もふさわしい形でこれを今日にまで受けついで來たものなのである。

進展するものであり、又「過ぎたるは及ばざるが如し」でもあつて、念佛も余りゆきわたるとそろそろ「及ばざるが如き」觀を呈する。心中と身投げの決り文句が「南無阿彌陀佛」であり、死ぬことが「お陀佛になる」と云はれ、ものごとくにしくじつては「南無三寶」、和讃の中に「八百屋お七和讃」などが出るに至つては、宗義とか教理とかはけし飛んでしまつて、全くの變形俗化といふにすぎぬ。或は北陸の「お藏門徒」佐賀の「秘密門徒」などの秘密念佛の如き宗門上の邪義異端も矢張り行きすぎの結果ではなからうか。

だがしかし、正面きつて「念佛とは何ぞや」と開き直つて見たところで、世の中の全部の人の頭を同じ水準に一律同體にする事が不可能な以上、矢張り一方には田圃の畦で肥桶の底を叩いて踊る念佛も許るさねばならぬし、他方ではジャーナリズムの線上で華々しく唯物論と對決する念佛も存在せねばなるまい。ただこのようなことを今更とり立てて書き立てて見たわけは、云ふまでもなく、宗教だ佛教だといはれてゐるものがただそれ丈けでは宗教でも佛教でもないもので、その裏には、又はその底には、そんなむづかしいことの一言半句にも關知せず、菩提寺の本堂の片隅に

坐り込んで、一心に珠數をつまぐつてゐる純朴な人々の胸中にひそむ心情があつて始めてそれが本當の生きた宗教になるといふことをふり返つてみたいためである。そこには何の理論も教説もドグマも存在しない。むしろ逆にこれ等の理論、教説こそ、斯る素朴な人々の信仰の在り方を理論的に反省し再組織した處に成立してゐるものなのである。われわれとても理論や思索の重要なことについてはいささかも疑ひを入れぬものであるが、既にカントの云ふ如く「内容なき思惟は空虚であり」事實としての信仰の實態をはつきり掴まぬ宗教理論は、反つて宗教を宙に浮かしてやがては根なし草の如くにこれを枯死せしめるものといはざるを得ない。念佛にことよせて、信仰實態の尊さ、重大さをいささかとり立ててみたのである。

百 萬 遍

京都に、百萬遍とふつう呼ばれてゐるお寺がある。田舎へゆくと、道端や、辻堂の傍などにも、百萬遍念佛碑が建つてゐるのを、よ

く見かける。

百萬遍念佛が、佛教の念佛の教理で、どお説かれるかとううことではなく、日本の歴史の上、民衆の生活の中に、これがどんな工合に生きてきたかとううことは、考えてよいことである。

日本で阿彌陀佛の信仰が、非常に盛になつたのは九世紀から一〇世紀の頃で、従つて念佛も盛に行われた。殊に、念佛の數量を、多くするとゆうことが、一の流行の様にもなつた。寺を澤山建てる、佛像や佛畫を多量につくる、何でも數量的に、信仰を現わしてゆく行き方がその頃には烈しくなつて行つた。極端な例でいえば、よく知られてはいるが、小豆念佛などといつて、念佛の數をかぞえるのに小豆を用いて、一石とか二石とか計つたものである。これは驚くべき數量だつたと思う。百萬遍念佛とゆうことも、こおした多量念佛の風潮の中に、起り普及した念佛の一つの形なのである。

多量化の傾向は百遍より千遍、千遍より萬遍へと、追ひ求めてゆくとともに、それは生活の全てを捨てて息のつづく限りが、よいことになつてゆく。もうそこには信仰に支えられた生活ではなく、信仰のわくの中に窒息する

生活があるばかりである。そんな生活を追ひ求めてゆく愚かさは分り切つてゐる。こうした信仰生活をたたき破つたものが、法然上人の淨土宗をはじめとする、鎌倉時代の佛教改革である。數百萬遍の形式の念佛よりも、一遍の至誠の念佛に價值があり、すべての外面的なものを、純粹に内面的に統一するのがその精神であつた。したがつて鎌倉新佛教の普及に伴つて、こおした信仰の數量化とゆう傾向は消えていつたのであるが、百萬遍念佛は、こおした傾向の中にあつて生きつづけたのは何故だろうか。

そこに内質の轉換がみられたからである。平安時代の百萬遍念佛は、個人信仰としての色彩がつよい。たとえば亞左府とよばれた藤原賴長の日記をみると彼は年々、正、五、九の月には百萬遍念佛を恒例として十日間或は廿日間之を成就してたゆまない。ところが時には忙しいので家臣を代人にして、とにかくその數を満了することさえやつてゐる。個人信仰として百萬遍念佛を行うことが、こおした形式化していつたのに對して、新しい方向は、集團信仰としての百萬遍である。

多數の人々が集合して、その總和としての百萬遍念佛を果すとゆうことは、あるいは信

仰の個人的深化とゆうことから及ばないかも知れないが、全ての人々が一座して、共同の目的を達するとうう點において、しかも更に云えば、その信仰をともしする一座を娛しむとゆう點に於て、すぐれたものがある。百萬遍念佛は、その普及に伴つて、地方村落の人々の間に、人々が寄合つて信仰の綱をともししてゆくものとして盛になつていつた。そのときには、もう平安時代にみるような、形式的な多量念佛の意味は消え去られている。

一般に鎌倉時代から、中世とよばれる時代は、社會不安のいちじるしい時代であり、社會の結合の紐帶が弛み、人々は互に警戒し、猜疑しあう様にならざるを得なかつた。生活の軌道かくづれ、自己を脅かすものが、いつも身邊に漂つていつた時代である。このような世相にあつては、人々は、そこから退いて、ただひとり個人の中に深まつてゆくとするともいえるが、他面に、本來孤獨にはたえられない人々は、社會生活とゆうことから考えても、安んじて共に語り共に娛しむことの出来る交り、集りを心に欲したのである。そおした心おきなく相交ることのできる會合、それは信仰にむすばれたものに、最も高い姿を見出すことが出来る。

地方にいまも残つてゐる念佛講とよばれるような寄り合ひも、こうした意味をもつて現われて來たものである。

百萬遍念佛には多くの人々が、ともにそれを果すことに結ばれて集る。人が集るとゆうことから、それが行事化し、定期化してもゆく。寺院で行われる百萬遍念佛會などには、それがつよく見えると共に、娛樂、遊樂的な面がかなり色こくなつて行つてゐる。

即成院の百萬遍念佛には、念佛衆二百人餘が集まり、之を聴聞しようとして參詣人が群集し踊り、相撲などの餘興がすでに行われていることが應永頃の記録にみえてゐる。こおして百萬遍念佛は、在々村々の人々を結合し相よつて生活してゆく上の大きな共同の紐帶となつて行つた。そこに信仰の歴史の上に、私たちはひとつの示唆を受けるであらう。

(皆さんの地方にも百萬遍、或いは念佛講の碑とか組織又はこれに類した色々の慣はしがありましたら編輯部へおしらせ下さい。)

佛教論叢

菊判百三十頁
定價七〇圓
送料拾圓

教界待望の第二號成り

宗門精銳の筆陣展開さる

見られよこの豪華なる内容を！

選擇集の阿彌陀佛觀

共同研究 佛身佛土論

山本空外

小澤勇貫

藤原了然

田中順照

佐藤密雄

一般研究

宗學

佛教

香月乘光

千賀眞順

寶田正道

春日井眞也

山口察常

太田正元

藤田寛海

伊藤眞徹

白井憲成

藤堂恭俊

安居香山

前田龍海

西川知雄

江藤澄賢

成田貞觀

竹中信常

大野法道

藤吉慈海

宅見春雄

三枝樹正道

松崎可定

田村圓澄

中村康隆

牧田諦亮

藤原弘道

石井教道

徳武眞有

細川憲我

嵐瑞徴

後藤元祐

吉田宣成

池口政芳

坪井俊映

松濟誠廉

佐藤良智

小島章見

鈴木靈眞

若林隆光

石黒彌致

稻岡順雄

東京都港區芝公園五の十

淨土宗教學院研究所

振替東京五九〇一九番

芝園だより

◇今年は豊作、氣持もスーッとす
る秋、本誌も清新な道を求めて眞
野正順先生の手で、淨土宗教學院
研究所の若々しい力を集結して、
出發することになりました。

◇長い間、皆さんに親しみ深い吉
田絃二郎先生は、毎月そのふかい
御思索を麗しく綴つて下さいま
す。生と死と魂、我々の大きな人
生問題です。佐藤先生は正大教授
鎌倉の大佛さままでおなじみの方で
す。

◇從來、執筆御後援頂いた先生方
をはじめ、毎號新しい切實な問題
心ゆたかな隨想など、それぞれひ
ろく各方面の方々の玉稿で内容の
充實を期しています。

◇困難な事情に圍まれて遅れてい
る發刊はすぐ取り返すために今我
々は大奮闘、表紙もバリツとした
ものに、頁も當然増加してゆきた
い。考えただけでも胸がおどる。
讀者の方々も會員をより多く紹介

して下さい。

◇皆さんの遠慮のない批評や希望
は本誌の發展のため是非よせて欲
しい。談論風發、そおした談話室
も作つてゆくつもりです。

◇會の新しい看板が九月の風に光
つている。事務所は張り切つてい
る。編集部は忙しい。

(FUJI)

珠玉を抱いて生きる。それは美
しい人生だ。何かを持つてゐると

いふこと、それは楽しいことであ
る。わたしたちはそれを「淨土」
といふ雜誌の形で前の末代から受
けついだ。前を歩んだ人々がわた
したちの「玉を抱ける」姿を見守
つてゐて下れる。左右にも、そし
て後ろにも同じ心の人々がわたし
たちに手を差しのべて下れる。こ
の心を確信していまわたしたちは

「淨土」を抱いたのである。くり
返えしていふ。抱いてゐることは
楽しいことだ。とともにそれは極
めて責任り重いことである。何故

ならば、わたしたちの抱いた珠玉
は、わたしたちだけのものではな
く、世の中のすべての人、眞實の
信仰に生きようとするすべての人
のものだからである。わたしたち
はこの珠玉を自らの手で抱くと共
に、自らも共に多くの人々に抱か
れて歩ゆんでゆく。

「人の生きる尊さ」そして、また
人を培ふ「思想」の尊さを、深ま
り行く秋の氣とともにしみにみと
感じてゐる。(TAKE)

中村辨康著

法然上人とその信仰

菊 半 截
八〇頁

再出版

定價三十圓(二十五圓)
現代の要望に答へた名篇
傳道に、座右に
即時御申込みを乞ふ發行所 東京都港區芝公園五の二〇
法然上人鑽仰會
振替東京八三一八七

「淨土」 九月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿三年九月二十日印刷

昭和廿三年十月一日發行

(定價拾圓)

東京都港區芝公園五號地十番

編集兼 眞 野 正 順
發行人

東京都千代田區神保町三ノ二〇

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神保町三ノ二〇

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都千代田區淺路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都港區芝公園五號地十番

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

會 費 金 百四十四圓
一ケ年

(送料を含む)

振替拂込みは手数料一圓五十錢増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年九月廿日印刷納本 昭和二十三年十月一日發行

淨 土 第十四卷 第六號

定價金 拾圓(送料)